



中済さんが町に水墨画を寄贈

本町出身の中済寿美子さん（宮古市・69歳）から、町に水墨画1点が寄贈されました。この水墨画は第57回岩手芸術祭水墨画部門で優秀賞を受賞した「ふるさと祭」という作品で、中済さんが大杉神社神幸祭の「お塩垢離」の勇壮な風景を描いたものです。贈呈式は9月8日に役場町長室で行われ、中済さんから沼崎喜一町長に水墨画が手渡されました。

この水墨画は9月18日の大杉神社神幸祭の際に社務所に飾られ、その後は町中央公民館ロビーで来館者の目を楽しませていきます。

イラスト



ん感じよく優しい方ばかり。山田は大好きなよいとこです」と言ってくれた。うれしくなりました。「私も山田よいとこ好きな町です。もし今度生まれてくるとしたら、僕はまた山田がいい。ここに山田がある限り」と言った。思えば中国と日本。歴史上長い長い付き合いだが、日中戦争ではお互い不幸でした。こうして会ってみれば彼女たちの心情を付度せざるを得ない。戦争中の日本の歌は軍歌ばかりになったが、私たち当時の若者が歌った中に、よくもこんな歌がはやったもんだと思える。

去る日、中国の研修生が帰国することになったので、送別会があると、老人クラブからの誘いがあって出席した。小さな女

山田よいとこ好きな町(六)

投書

どんなことでも結構です。どしどしお寄せください。

古里への便り⑩



ふる里山田同郷の会幹事
東京都新宿区
菊池 敏子 さん(72歳)
〔中央町出身・旧姓菊地〕

初秋の候、皆さまにはお元気でお過ごしのことと存じます。私は上京して五十四年、在京の同郷の会にご縁があったのは、主人が会社から出席した会合の席で初代会長の萬さんと初対面したのがきっかけで、昭和六十二年当時の福士町長さんより「二年間ふる里山田活性化推進協力員を委嘱する。ただし無報酬とする」と書かれた辞令書を頂きました。主人の許しもありません。今日に至っております。

お役所との関わりあるこれらのことは、総務、研修、広報すべてがルーズにできないこともあり、二十八年間私にとってはとてもよい体験だと思っております。その年代々でたくさんのお友達に恵まれ、私が自慢できることは郷里の品は誰もが「一味違う」と喜んでくれること。また郷里へいらした方は「取りたいの海の幸は最高でしたよ」と感謝してくれることです。こんなにうれしいことはありません。江東区にいらした木場でのふる里まつりは楽しみにしております。山田の海岸で、海に落ちた

ことがきっかけで泳ぎが上手になったこと、餅のモンペ（ズボン）をはいてお琴やお習字を習いに通ったことなど、懐かしい写真がたくさんあります。誰よりも尊敬できる両親と大勢の兄弟に温かく見守られて育った山田、そして今は私だけでも二十人の甥姪に恵まれ誇らしく思っております。また結婚して一度も病気に健康でいる主人にも感謝しつつ、毎朝富士山に今日一日の無事を祈り両親に感謝して、無理なくトリム体操、ウォーキング、学習と元気に過ごしております。何一つとりえのない私ですが、ふる里会では参加した皆さんが楽しく過ごせるように、影でミスのない優しい心遣いができれば幸いです。どうぞ郷里の皆さまも健康で楽しい毎日をお過ごしください。

の子を伴った中国のご夫婦と帰国する若い女性二人が出席。山田のNPOもお世話しているのか、寺の和尚さんもお出席の予定でしたが、用事ができてご欠席された。教わりたいたことがあったので残念に思った。男性の参加者はクラブの会長と私の二人だけ。女性の方々のにぎや

かな歌や踊りで盛り上がり、中国の娘たちも楽しそうにはしゃぎ楽しい集いになった。彼女たちの日本語も発音がしつかりして上手でした。そのうち各席の一人一人にあいさつに回ってきた。僕の所にも来てくれたので「山田での日々はどうでした」と尋ねたら、即座に「皆さ

のが一つだけあった。戦争に巻き込まれ流浪の旅に悲しむクニヤンの歌だ。

うだった。民国のためと、お若人（兄）たちは、内地、外地を戦場に、義務を果たし戦死した。父母たちは戦争を恨み、悲しんだことを子供ながら体験し、人情も植え付けられた。また、一国の主が靖国神社に参拝し、哀悼の姿に心癒やされ、ありがたかった。言論の自由とはい

二、知らぬ他国の小夜町はずれゆるる灯影が身に沁みて明日の旅路の憂いがつのる胡弓ならして胡弓ならして

え、近隣諸国ならともかく、早朝からテレビ放映、首相の靖国神社参拝に机上での「合祀」うんぬんと、賛否両論の議論に悲しかった。合祀された戦没者は心安らかに眠ることができただろうか。複雑な思いの六十一年目の終戦記念日だった。合掌。

三、耳の飾環夜風に冷えてせめて仮寝の夢に見るむかし恋しいニヤンニヤン祭り

菊地サカエ（織笠・71歳）

ああー何日の日に何日の日幸は巡るやら

十五夜の輝く光陰裏に陰る事なし老いてますます

か？では、また次回よろしくペンネーム・山田北州

新病院オープン迫る背景に旧病院の尽きない名こり

61年の終戦記念日に思う

補助輪つきの自転車ではななれ小僧とあそぶ幸せ

八月十五日、正午のサイレンに姪と黙とう。戦中、隣の「はたご屋」に予科練たちが宿泊して「松根油」工場で働いていた。夕方になると、二階の手すりに

大川ヒメ子（大沢・62歳）

もたれ、思いにふけっているよ

敬老会なくなり寂しい俺が町

山裾の秋色纏い風渡る

ペンネーム・夢子

（田の浜・65歳）